

親元を離れ、 東北・弘前で過ごした 3年間

リハビリテーション科学部
理学療法学科
教授 鈴木 英樹



道北の片田舎の高校を卒業し、進学した先は、旭川でもなく、札幌でもなく、なぜか同じく雪深い東北は弘前市にある3年制の短期大学部でした。なぜ弘前だったのか。そこに深い理由はありませんでした。高校3年生の夏まで部活動に明け暮れ、1984年のロス・オリンピックでのカール・ルイスの活躍をのんびりと見て過ごす夏休み。進学先をどうしようかと考え、まずは受験科目から学校選びです。運よく?合



弘前と言ったらお城と桜、花見の時期は講義そっこのけて宴会の場所取りが下級生の役目

自己決定と出会い。 そしてつながり

看護福祉学部
臨床福祉学科
准教授 巻 康弘



「追加手術をしませんか?」。主治医からの問いかけに「お願いします」という母に、「あなたではない。彼に聞いているのです」とベッドサイドでの予期せぬ自己決定の求め。中2の私は、ちょっとうれしく悩んだ記憶があります。結果「手術=留年」。母の意向と同様だが重みが違った。中学4年間の道の



子どもたちと仲間と取り組んだ「子ども祭り」(前列左側が私)

格しましたが、その際の面接では、とんでもないことを言っていた、と入学後に教員の先生から教えて頂いたのです。

入学後、最初の講義はリハドクターによる神経学の講義。板書なんてありません。途端に不安になりました。二講日は、骨解剖学。こちらも、時折ある縦書きの板書とお経のように流れる講義。寝てしまいました。下宿までの帰り道、「こりゃ、とんでもないここに来ちゃった…」と後悔したことを覚えています。

短大での3年間は、とにかく先生方に迷惑をかけっぱなしでした。勉強の方は要領のよさと、先輩からの情報収集などで何とか乗り切っていましたが、課外活動でケガをして講義を休むわ、長期実習中に風疹になって実習先に迷惑を掛けるわ、挙げ句の果てに、最後の長期実習では、実習ではなく、実習先の病院行事で

私の 学生時代

今、本学の教壇に立たれている先生たちは、学生時代をどのように過ごしていたのでしょうか。今回は鈴木英樹教授と巻康弘准教授のお二人に、当時の様子を語っていただきました。

りへの不安は、先生の勧めの合唱部での新たな出会いでそれなりに有意義なものに。高校は写真部でバチリ。大学選択にあたっては、自己の将来像をイメージしたもの、中学校の先生?、ロバート・キャパ(戦場カメラマン)に憧れ写真家?、思い描いては消え、結局不明確なまま社会福祉学科での大学生活がスタート。

大学生活は、時々真面目に聴く講義は興味深い。しかし、最も興味深かったのは学生セツメントでした。毎週市内の公園に向向き、子供の異年齢集団作りを通じた地域活動。平日は3地域での実践の振り返り&飲み会。衰退していた道内学生セツメント団体を再組織化し、医学、看護、教育、経済、英文、社会福祉等々100名の再結集へ。医学部の先輩宅での毎週泊まり会議&飲み会。全国組織でも合宿&飲み会の日々。個別から組織へ。自己や組織の意思決定の苦労以上に、組織からネットワークへ広げていくこ



1学年20名と小規模な学科でしたので、先生や先輩後輩を交えての飲み会はしょっちゅう。(写真中央のストライプ柄のシャツを着ているのが私)

張り切り過ぎて腎臓を悪くし、実習中止⇒追加実習⇒年末年始にむりくり卒論完成といった有り様でした。

しかしながら、先生方はいつも応援してくれました。そして、地域に根差した講義や演習の機会を多く設けてくださいました。卒業後の最初の就職先は総合病院でしたが、その後、行政や地域リハビリテーションに携わることとなったのも「弘前マインド」が大きく影響しているのだと思います。そして、

恩師の後押しがあって教員になることにしました。このように、「弘前マインド」が現在の教員生活や日々の講義にも大きく影響しているように感じます。

とで、様々な出会いが生まれることが面白かった毎日でした。



道内のセツラー(先輩宅)での一場面(左側が私)

一方、時々真面目に聴いている程度の学業は、今ならOSCEやCBTで不合格間違いない。実習は甘くはなく事前学習不足を痛感。にもかかわらず「障害者の自己決定権が保障されてない」等の生意気発言は大学への苦情にも。2度目の実習の実習指導者は、「そうなんだ。現場は変える必要がある」と受け止め、自らの考えとともに休日も含め付き合っ下さる姿に「かっこいい」と。さらに、せっかくの「自己決定とパートナーリズム」をテーマにしたゼミも、出席率が悪いにもかかわらず、厳しくも優しい多くの問いかけを戴いた恩師の姿もありました。私の学生生活、そこには、体験と多くの人の姿と酒が満載でした。